心學道の話 六篇中 十七

ロ 9
3895
17

門ロ9
號3895
卷17

早稲田大學圖書館
昭和27.6.16
藏書

心學道之話卷之中

此こゝろざし幸の規矩よりぬ事とちゝとれ共ちゝ
ゝまのせ〳〵。是い近比あつさるゝまたぶ或学の
上の米義よ米が大造積である事。或日その所の仲者
が多勢よつゝその儀と外へ指出しまたまそれ藏の
入口所分ゝるゝ後よりてある儀の内に別よ一儀外へ
のぞ出して所る儀があつて。その儀が多勢の中者の儀
ちゝぶ是下の形ゝ有つてあるぬかゝ中よ一人言ゝと
つゝ三十ばかりのうつゝ中の仲者が見て此儀ゝ是下れ
形ゝよあるうゝ多てのけるがよんとつゝと。仲者ゝの出ゝ儀

といふものゞ少てイヤ〳〵それハ定めて上の結の後中うれ
ユ合どりゞ為つて用ゐのためよそ而〳〵一結ゝ中せてある
中しも智をぬう〳〵て〳〵邪ゞよあろうふこもそのまゝ除ぞ
よ垂けといふと少入ぞ。かの吉六が力よまうせてその結と
引ぬきまゝ〳〵多ち垂ふ多結だかゝの結がぞ〳〵〳〵ユ合
よあつて為〳〵りの中う一度よぞつと為をかゝつ〳〵その吉六
い為でぞつゝう結の上〳〵為ぞ。ぞ〳〵仕為まゝ〳〵とかゆ〳〵多事も
杉〳〵い大為のゆる而〳〵ある事ぞやげよ出ぞうゆゝ。
ちぞめ氏吉六も仲脊既のいふるゆを少〳〵入らざる後ゝと
せ為ぞよう〳〵ゝよ。行の為ぞ〳〵のゝせゝのが行の為〳〵ふ

ちるものゝといふ中〳〵ふ迂闊ふ〳〵力よまうせて抜ゝ中人
ツイそのゝ〳〵ふ為〳〵ふ用よ今ゆ〳〵。扨それう〳〵ゝ為の
仲脊よりゞ行でも而為ゆ〳〵るゝ〳〵。定めゝ難い停け
ひ〳〵げて為るであろう〳〵一刻も為ゆ〳〵上の結と除て中るが
よゝといふてかの為ゝ。結の上〳〵数十人の仲脊が上てユイサ
〳〵でゝ結ゝ除て為るうゝ凡結の百結だかゝふもあゝ的
フトゝんまゝゝゝゝ〳〵下の結のゝよかの吉六がゝの中ゝんゝ〳〵ゝ
げふそゝでヤ〳〵吉六い爻よ為るぞとゝふて多勢よつてそゝ
の結と除てゝんれば吉六い泳よユ合よゝ結と結の合掌立ふ
あゝ〳〵為るその為〳〵様よゝゝまつて為ゝゝ中〳〵ゝりの為と也

たがらしてだかうで外よりの病不もあり命もふ思議う
助うやうしてゞ。わしと僕僕あるやうものじやゞ。昔かしそ
やうな大造な信仰の中に貧乏して命と助つてものわんげか
ゝ武士いハ僕僕と信の間へ立合よしまさうつてその中に
たまゞ命を助りやうしてゞ。見ゞ正直の僕僕とつよものあま
べ親則ようあるぬるじや。見親則ようして他のものゞその中そよ
あゞまいるまるいつでも難ハ辛て仕家それじやようつく
マアノ〳〵その中ふこゞがまさいるんと擦よせだよ難如〳〵親
ようハ高ゞ〳〵主人ようハ忠義と〳〵旅〳〵の家業と大切ふ勤めな
法度と大切よ守て万るようと西亜〳〵て居るのゞ家よんじや

さう〳〵さう〳〵での貧富盛衰幸不幸ハそうや皆弱くの
生れ合ようそうあまハ仕方の自ばようじてもあ
らぬじや。そのう〳〵又乃ゞあつての幸福不幸ハゞよ
あつてもゞよ苦しみゞあんうう。たうひ夫死をる
そてもまう験ゞいうとうよものゞ。又乃ゞあくてめつ
さ妻性よ長命をるとそれ長命の品蔭で子ども
孫ようも孫ようまでも死後まて後ようまるの人よう
まで。イヤ死ぞこあんじやのの沙婆ふさげ〳〵やのといえ
ゞ考ふ思ものの中の嫌が〳〵まて難義ふ苦〳〵とせ
まやあらぬ。それでいつまで活ても活と験ハちん

じやがいろ〳〵なると人の長命も尽がありてかゝるのも尽がありてのもの命の長命をする程苦〳〵みが湧てくるゝ及て大きゝが不幸といつゝりのじやそれゝ又人の身のうへうゝこゝて命ゞ長いの短いの過合じやの不過じやのといつゝけもどかぎりのあゝ天道様の眼うゝるゝとてゝゝど水の上へ浮んゞ泡ゞ大きかゝくゝのふかつゝの長かつゝの短うつゝのといつゝて用ゞるゞでゝゝの譬言といつゝものじや。為じて此世界に無常変易ゞ常〳〵ありて在る世界をばわゝゝゝ幸福の中ゝゝる聖徳ゞひつゝゝもとても千年万年の寿命と保つゝといつゝるゝい出来ゞ長いゝゝゞ七十ゝ

八十年百年ゝゝ不足命それと一年三百六十五日ゞ
つゝりてゝゝると百歳中で活〳〵ゝゝゞ日の数がたつゝゝ
万又千又百日ゝゝあいゞそれでもその内ゞ什年三十歳ゝ
ある人ゝゝ一万六百又十日ハ引てあゝ又十才ゝある人
ゝゝ万七千七百又十日ハ引てゝるといつゝものあれば
残りゝゝづゝ二万日ゝゝらぬ一生。それも尽百歳まで活る
残りでのゝゝじやゞまして七八十才と一生ゝゝる人あゝゞば
活りの日ハ数ハゝゝ万日ゝゝ足ゝ万足の命じやゞその
ゝゝゝゝづゝの境界ゝ。尽と知〳〵ゞふあゝせゝゝ苦んで
めつゝゝ小死ゝゞゝるゝゝりハ尽と知て一日ゝりゝゝも

今日と安楽に暮し活らる命ぐけに活て楽しむべき
筈なんぞうもけれ若いかあどに老うと後の乃中の余
程長いうもあるべその内山坂まいろうあるもあろう
かうまく世間へ出入かされ本心の修行して我の活と
天命といふものを知るあるべきぶよん。孔子様も朝聞
道夕死可矣と仰られて道を知るべ活と
天命が知るる由人あるうれたるあるぬるはあるぬといふ
うと心は心かは変ぐが出来るかたとひその中
そこで死るとも。思ひ残るもあるべ。そのうへ系とわが
身で背命をちぐめる中うかるもせ残べ。一代の乃中ぐ

弱貧ザあふ安楽で通らるさうあんと。いろいろあるあ
かうつく大切か天命の糧と行でもあいるふ果して仕業。
それで人は活がうるふてもひとうとも。本心知べ弱べ
の生れ合のいるうるとうつうと実学せ残べあるぬう
どや。その又そもそもの生れ合分限のいるうると今一つ大
切なもうもうやさうあるべ。人の赤の内にある佛性といふ
ものは行ぬまでも青蓮よかぐうえているものぐ通
頂主宗の佛壇あどでうるとと内の張附は熱食張附うして
中の上段まは結構か掛ねもかけてある根の方ぐは活構か
花活ようのうなる花と活ようう文生の縁の稀燈中ぐ稀毒の

ろうそく立やう香爐やう香盒やうそなへ結構な
品具と拵へ立てく常に名香の香りとたやさぬやうに
まろうゆへ。誰でもその為へ沈と天竺とかぐめくやうぬ
やうな位のそろいものをもつて。是と人の身よりたかくく
いへてゐるとてうどつて上こく掃方の出番しうえいかく
で。いくへ金銀も家財も仕やうのあんばい持く
ある分限者の内とゐるやうなものじや。又はし一形の
家の内ふりつてはじやうが一ぢう者ゐるうのもので是ようう
下の物しいものいとへいへ位のものはい。行ぞといふやく
そうや尾籠ふるまじやが雪隱じやが是も人の家まい

一日もおくてはあるまぬ大切なものでゆ法をうけのうれと。
あの佛壇よりはべてゐるとそれいく位の物しい汚穢いお
で此やうな席でい。ちとはそうふもちうまい位のうのじやう
是と人の身よりたかくへていへてゐるとそれい幾の一文
物ぢの貴き人。その日うせぐの浮るものとゐるやうか
うのじや。扨そのとうつかくちのうへの貴賤上下と論
じてゐると佛壇と雪隱いその中ふ途方もあい遠
やうじやが一形の家内よりつく今日用を達しへ人と思
ける家の妻と婦じてその流よりは半銭上下の差別い
あい。そうやかぜとつてよりぐ内輪ふ志しへ事ぞもが

いつく旦那寺の和尚と結構しかしこの法でもすくなくと
いへば法解でもかざりつくり佛像でもかけつくりもるあい
そうやぞへつくても仏壇であけくれば仏もあるぬその
時うえてもあるかどうぞのやうに寄藥よもつろうて
いつてもそうもその事へは出合れるうでいあいがそと
かしその四義めるもそみ様で解やく菓子やく四様
やうさまくの料理と出くてその和尚とあてあんを
和尚も四様の上合もよくくてその四料理も出くて合殿
あやうい出くて四ざる内よもいいくお様がめどつて来ると
コリヤ　ちと尾藥あるあるどどへやくかの正へ行くへあら

あやうしやそへもちろと次の四へそつと立て袈裟を
きづくうう衣を纏ぎうしてあちうちうちをえ出くて
四ざるを幸を見附ていあるさちくへ四ざりまんぞと
いへとハイちと用事ふ来うくへ出ざうといえあやるそん
あうう雅ぞ四業内ヤセといへ的傷ばかう気の利ぬ男が
出てハイいあるさ様の出用すあうう変てこちくで四ざう
ませへといへて仏間へざる法を立て往くくうんてさがよん
いうあ和尚でも汗と法ぶくてイヤ拙僧が来うくへあん
変でへちざくぬ代やうあ結構が変が今行の言を立
をめうざへで用場へ四業内下されくいうくふちがひ

いかんせんその時ふんどんが結縁が金張府の佛壇があつても
唐本仏の教寧座がいつてもそこでもちふん合ぬうち雜宵
るもの仏件がいるもいつまでぬで出屋とすぐめてウロく
ウロ〳〵迷いきやうにちがひいるいがその内よいよ〳〵たづん
で来てモウ〳〵たまらぬやうに成ると来ようるほし
ふ度〳〵乗りの書の方を見出して下雪原でも足府らまを
そうその時分熱びいどんがそのでいろいろ雜宵やと
その内（弘迦寺のようちがひいろまん。それうち内で用と
違して今までの苦悪を逃れた大安楽をいらるいい
そりや全く雪原の出張あるべやつそう雪原る抜

苦與楽の大切流いそ分（てあるといふものあるべ其
流ふおいていいも紙しんのきそのいふるいあん
りのじやうし雪原もその天よりそこ雪原の流を亡らび
入来る人と日く助けく所さんそれでそのゃ〳〵
仰で天よ愧ぞ仏く人よ愧ぞといふもので。やつそう
そうんのふ遠ひいあいよ。その雪原めが天命の度を知ら
ぬとその系そうん流のあるそういいるぞおりく仏壇後
の方をうんて来ていい浦山しがるでやく仏壇後い法弾なの
そのじや内の信愛い無金張府ふ法弾なの
弾なの抑ものかけていろう志縁の光活やう鶴亀のろうそく

之中ゝの仏器しやの打敷じやのと絹ふくろの内でハなくて
るものあれやうなかたちの奥とかゝべ之。是は香のかをりと嗅で
行一つ用自性のあれやうなかたちとなりて西へ之等
人が旨町嘗よりくきまをかぐめて敬ハまるがそれかくん
まべ仏方のうちハ浄土しいものじやほど世界のもので
ありながら年中人よりゝ附られ。是は石浄を入られて
石浄所〳〵と称しめしる。それふまゝ渡器じやの渡瓶じや
のといふものハ仏方の別家のものなどそれハ反つく
新るゝ〳〵よりゝ方の正法敷へもなまるゝやうゝ事
じやが仏方ハそもそもそのやうなものでなる事を

かなるべ、ア、ア浄土しい方のうへじやどふぞ生涯の思ひ出
ふ仏壇及のやうなかたちとなりてふとなりて仏壇
めが光と浄こう香と焚こうまら綸の輪燈よ鶴亀の燭台之
金の正仏器よ金襴の打敷とらるづくくんせくなが根
が香炉のうすじやふようてそもそも。手ぬく仏像掛るものも
ありけゝ神べ。ひくきをかぐめてうやまふものもありうせぬ
がさうべといふくそのやうふ輝金襴の打敷ものなかゝべ
てある家へいふたづんざ物じやといふても用るの達
しらまうものでもあん。そうまるとそれが即よ弘法と
仏壇の片羽者でなくつゝ仏法とも亡なふと魂の世界のじやま

その田へ叩きつづけて居ますよう和いちん。人がてうぢ
その中ふのものでおそれあがるよの天子将軍様から
下万民まで迄それ〳〵の天社金令あるを守て居
も出その外〳〵の生れ合と大切ふ天命じやと存ず
どんなつらふるあるとめつてくふをがを苦しきばかり
愛と出るか〳〵と出て出るがいつちよいさう〳〵しく
おれば又よん天命がいつつ〳〵ぶ命が来ると暮蘋が殺す
ぶるものもいたべ茄子のかしらが泥鰌よあるるものもあり子くが
蚊よ殺ふ芋出が蹟よあるものふ天命もいるものじや。
それがやつぱり順みてそこ出と愛といふものじや。それふ

その天命と知らぬ凡夫いなどでも世界ハ我がものふ
あるものの中ふ出ふうちがが愛花の家業や職ふ入ろく
くふ出ふあびしてめつて毒性よ自分ふ入の出世
出ようの金とふけう楽よあらんのことがを苦し
むが居と知て不愛の眼ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵の
毒ふものふ思ふでいろふ。それと一ツ地をのふ出ふ〳〵
いふてゐるとアノ亀井戸の天神様の辺ふハ蔦を亀と
中いふて亀の胴中と糸でふ〳〵ふ〳〵末の枝や屋根裏へ
幾年も出ふうさげて黄ますがアノ下ふ出て居る亀の中
みもいろ〳〵ふ亀があつて我がふ〳〵ぶハ天命の糸よふ〳〵

らをてゐるかゝ。そこも我儘よ逆らをへせねこいふるを
よゝ行ゑゝこと悪ハ古ハ狂奇よ行るこつゝぞもも知らぐ
かゝらも知らぐ尾も知らぐ分とあさめこうる悪ハ万
年と知りて首もをももこゝ胴の中へ ぢット引込て只
買て池の中へ放してやつこと行ふこそれハ逆ぢて為の中
を自在自在よあゝ死まるるゞ。中に天命といふ系のある
るゝと知らぬ悪ハ我自力で逆ぢらげらるるのやう
ふ思へゝ我かゝゞハ虚空へ弱ぢてありあゞゝ首や手
をと長ゝ伸してけちゝを向てハガヤ〳〵がやつこ迫る悪
を人ゞをんてハア、あろうかるゞじやし思へけをどアノ悪の

ゝゝうふハ逆ぢふへでけうあをんでも今朝かゝ
モハ 二三里もけうひて来ぢやうふゝ水のある所へ
出ぢふへをものどやはゝ高ゝ所のをこいるゞじやけうをいぐ
であるうふやあゝねとゝふへであろ。それでアやこにいつまで
も虚空と相人は一ッぢとがやつけゝ後ゝふへ首もをもつゝ
ぢをて放ゝ人の来るも待ぐで寂滅して往ふへもける。てゝど
人ゞあのをこうをりのであんがゞあぢでるがやはのても
をても天の恥ゞかけりやゞふへしてるゝ世界ををふへや
をゞ紀ぢふへをりや自力でるゝ中けるゝるのやうよ小人を
中のふへゝ険ゝぢと行ふへて幸と求むと登らをもせね

がけ百と手程堂伴は登ろうと思うて揉うもあるまいこと
を幸と揉ふして ひとつとすれば富も物さうなるものが
じやといふて富のれと買ふて ひとつとすれば損
も勝るるものがいるものじやといふて米市へかつて
ひとつとすれば縮緬も売るものがあるものしやといふて
いろいろな歌るものとたらんどうひとつとすれば変るも
があるのひとつとすれば熱くなるのと揉うもたらぬ
ひとつとと揉うて高ぶる迷うて居るものが多い。
それが皆巌牆のもとにうとといふもので活と天命わか
いふるものをあらぬ人のかるしさじや。そして人差い気

あるどいアノ蜘といふ虫が膜をとるのでも考へてみるさ
まを。あちらの木の枝からこちらの木の枝へ間二尺
ばりもあるうとおもふ。大造な膜をとつて
やりたいアノ蜘は羽もあけら移が飛でも出くまいが。
そんなちいさい蜘の糸をかけ渡しいでいして仕おつたるので
あるうとぞ。既はいろ所沈の蜘の膜の模をとるのと下ろう
服を附ておまをば。沈は感心おるものもるものでぞう
まさじやアノ蜘が蜘膜と張ると思ふ所がすぐ
ろうとあるうと糸おもの糸を十分あるうと延へして有り
蜘といふものはめてぶらぶらとつて下つて居るだろうで

自身うらぐちの木の枝へ花よりも糸を結へつも
屆かせぬじやそれぞれの君子い君易而以俟命といへ
りのでは糸を延ばしぐけのりぐ文芸の在を十分ふ
勉めて在るぐんうりでそれらう後の知らぬを以
天命の風よりせきつて在るじやきうすりとつれ
ぐちらかぐぞ天命の風ぐ吹て来る中へその時その
風よりきぐんて命の木の枝へチョイと取付それ
ううその糸を結ぐんて行ちぐ後うちぐ引ぞ
うしてあの中なる大造の渓をちつぐかぐつさわと
為て答ぐて在りやんぐ行とうめぐものじや

あいう。人もてうどあれうそふたぐ糸在とを事
くホ十分よ勉めめんてその余れるれ行るも天命
の風よりうせきつておけばよんよ小人ぐきうやぬりの
じや見と所分の手代子あじどのるすでいつと初め奉公
ホ来ぐ時の白粉をとりつまでもるすれぐたぐ主人大事
半公方るの一心不乱で番賣の在ともぐくぐ文芸
の勉むべき在と勉むる分の糸を伸きるを十分うう
して在をべいづを後うぐ天命の風ぐ吹て来て布簾
をちぐくふて番遠入ぐ出来るよちぐいの知いるとその勉め
の糸を伸ばるうぐ肩とおもんでろくくよ勉めぐ。

商賣のたとへもおぼえぬものがたりや糸とかくの如房と
かくのことのがれまたるそれがカノ珠ゞ糸と伸を
るゝ中しだかう伸してあるて只命の本の枝へ花付
ふしくとなるがくもるものでなほよつて変が後
の糸と引切て命つゝ花付そのじやかゝ又もとのたり珠
うゝ仕直さうやでふしても後とたうるゝ智恵ぬかと
若い流それでハ信られぬものじやあんうむりの若い若
いたゞめを出してもづ家業のたとおぼへそれうゝ信ふ
別家(べつけ)して家とかそれうゝ信ふ如房とかそれうゝ信ふ子
とかてその家とかそれがやつそう順(じゅん)てそ正

と変といふものでゆ来くふ後とそつて中死おつさめの
とゝんへるゞ今時の若いものハそでも色がみぢかふあつさ
といふものゆ中家業も若へぬさきに家とかふとたうう
家もあいさ紀よ如房かふとをぐふうさぐゝる
遠ふことのハ如房もあいさ紀よ子うゝ出来て強義さう
もなるげかつちほよ出来てよゝ子がいつちさ紀へ出来
るゆへ者ううことなりしれわへの女と如房よ者さ変辻ふ
立ても者ゝ色ぬうゝんぐうろゝ後納屋の増(ぞう)書
信家の隅(すみ)と信て家かても後世の花ハ行ふも知ゝぬ中へを
ゆふうゝにうゝへ出ゝて見ハ(マヤ)ぐふくものでゆうゝふ

と女房よりおぼしてゐんでも女房もなじやうに袴をこしらへ
精でいづれ人のあとをたゞ引るゝ者へ外思ひつゐぬゆく
あるうるまゝにマア紙屑買ろ　紙春ごもへ煩かぶりども
しそれ絵馬〳〵ども賣あるゝ〳〵より外仕やうがない。それが
カノ下り珠の糸を切る〳〵発ぶのじやうに生涯発義せふ
やうらぬ。あゝ〳〵やその町方の男は者のるだうりじや
あんで一理万通といふて士でも農夫でも醫者でも出家
でも百姓へ皆一ツ百姓さるよりて人へ共我が知る
活と天命とのふるを知りそのの天命の乃よそむうぬ
やう今日を大事〳〵思れば情ま移ぶるゝぬ事じや。

さうゐいとそ〳〵でも世へ共ぶ知しまくの肩かぐ
あけるるのやうよおのふうゐ弟子弟子の職分へ
除ふうして博奕をおくうお場をしうう人と歌しそれあのれぐ
所へ利と成るる考てうう人のるを弱ういひまうしてふおのれ
が立身のをあげるおうと者ゐうゐ弟子者ゐどでい弱い
友達と附合ていへ恐ひのそびのまれとまうう立親の眼と
思んでい小家遊入遊女ぐるひをつうう皆あぐのれるの天
上で厳猪のりに立のじや由へいづれ仕業へ身と投るう首と
うふうお弟死をるるよ。〳〵それやでいれぐでも大義千る
うう散をるう面ようふう家形よあるう異と義されるう

眼を潰されるようにいろ〳〵とあるく。ふ迷う所をせうやうもないが。その所はあつく〳〵行とせへ。是も天命じゃと。天命といふものはあさはかなるいのじゃ。ふぞと。ふかく。あした道地獄に美ふも知らず。天道様とうらみうらみ。人の身のうへとうらやんぐり又遠い田舎あどでは。畜生殺ひの今生業といふものがいりて。世界うづれ境界。あまべだ〳〵でも。浮るのやうに。親子兄弟。主人に不忠と。夫婦げんかをいろひ。喜捨するやうに。人とたぶ〳〵かたやう。喧嘩とうつやう。悪とうつやうにいろ〳〵ふユまとたらんでい。あよ〳〵苦労をあるやうなる。

あるうり人の所へ行ると。皆ていその者のうへとあるうして。ひげ〳〵のもてる。縛り。もうり。柳かもうり。肆もうり。首切られうりそれと。極悪もして死もる者とて。てゐるが。極〳〵見がせのる悪いるがせのるじゃが。その中ふ見ぐせや。ふぐせの苦しみと。死ぬるの。閻魔の天命といふものでいろ〳〵正命ユ非ぶといふ。ておられとが。それとやうに我自力でうら〳〵とうと。れいろだその中ふ。ふがせや見ぐせの苦しみと。分り。引ふのこ。ほ。ふ。ぶ。ぶ。ぶ

せゝゑも過去生の因縁(いんねん)するじやのいまも若生(わかい)ち
ゐる糸じやのといつて居るが仏のそのやうな長つゝしん
ゐる糸にして生れるものが仏の世界にあるものの
へきじゝかぐらしをがゐが我あぐらいづをう入て若ゝぞする
南上かゝへぐらぐで仏を金入らもるやうふるすしてられお
よ仏早縄(そうじう)で縛ゝもるやうふるすしてられおよそのゝめ
ゝ多へ仏やうに出ゝてかぐつて居せて動ぐゝ形ぐゝよ
くゝと作らゝゐでゐる役所の玄関や警固(けいご)の若の出
張ゝ変ゝいつでもアノを金や早縄や獄天(じごく)ぢちやん
と無て居せてあるのじやよそれよりちゝゝゝ出ゝく

往(いつ)て　ハイ　さやゝでいゐぐうやせうぐぐふぐひをへかゝゝのゐる
ゐへあるされて下さりやせ。私ハひをぐるゐるもて居ゝた
と若角盗(ぬすび)ゝ中へゐ邪ゝでいゐぐうやせゝふぐかゝゝのゐるぐる
ゐ世話ゝ中へゐ邪ゝでいゐぐうやせゝふぐかゝゝのゐるぐる
ようゝゝゐぐうやせゝゐへあるれとやうやせゝ又ゐ落ゝ
あるつてやるつてもだいぶんゝろゝふゐぐゝノまるせ。
我をと我と後をゝうゝかうゝ又前でをとやうちぐゝゝう
ゝて出るものじやかゝ。ちゝゝゝゝかゝにそんあゝ(マア)
ちゝゝの通りふちてやろふとをを金とゐへあるれゝう又
ゐ縄でゐ縛ゝあるのじや

畢竟のかゝる恵のいのちをば下うけれぬ中に実貞ふせよ
ものゝ実貞ふさゝへてあるまゝ。此世も後の世も行も悔ん
るも、なにもこゝろ心のうゝいせぬのじやよ。そうゝその実貞
かるゝハ鎌ゞつゝ行の此世のすハ世間並のすじやうゝよん
の此ゝうゝいの悔ハ人もなくゝるすじやうゝかまハぬの此世の隙
うんよんの此世の悪ハ元づうひあいのこゝりひゝく此世うゝ
未来永ゝの地獄の釜うげふかる立場来仕おうふいこゝんこと
ものじやそれでそのゆゝかゝ後生願ひと佛法でハ恰はゝ
といひすてげふ。ちぜさうゝあるまゝ。アノ後生ある恰ゝ
いゝものハ元来法の底ゝ生れゝものでゆの底がゆまゝ天

命の法ふあまゝのつまでもその法の底ゝ流の中ゝ源ゝ身
とひそんで悔んでおうさゝへまれバゆの中ゝに後人ゝ身
らまゝうゝ元まる元来ひもあるまいゝ満潮の来情ゝ
後ゝにツイうゝゝと干潟ゝ上う浅瀬の水の中ゝ底ん
叢雲のゆにウグリゝあるうゝツイ後人ゝ身ゝ悔られ具後
へ引かけられて取まて赤ふ。そゝまるゝその恰ハのづれ
ぞゝその釜の中ゝ湯の中ゝ入られて煮られる知れゝ
すじやゞさうゝ入るゝその恰ハそゞめ干潟で後人う
入ゝ悔られ具後へかゝうゝ悔ゞ。ぞゝその地獄の釜ゝへ
られて煮られまゝふゝのゝ此世来ゝまゝうゝのゝ遠ハハあん

ゆ〳〵ア　恰の字〳〵まるのと人目の眼うつりて有るとヤレ
不役やひの恰を〳〵具揆へ引うけられさと又その恰もか〳〵
つくと物よさ〳〵れる後〳〵ふまとすけるやうに思ふけま
ど恰ハそのかゝるうまと行るもうらぶ思ウカ〳〵とかゝつてわ
篭の中へ〳〵れ具賣のまへ渡されると具賣ゑ市中と
恰よ〳〵とつふて賣ひう〳〵その賣物と人目の耳へ
宵とヨウイ　恰どや〳〵　ハ恰とぞこぞの釜へ入て煮や
ゆ〳〵ぬうぞ〳〵ぞそ〳〵に恰と煮る地獄の釜も
ハざ〳〵ぬうといふて納まるのじやよ。恰ハやつもうウカ〳〵
でおもとめづ〳〵ち〳〵籠へのせて行所へや〳〵ハきて渡

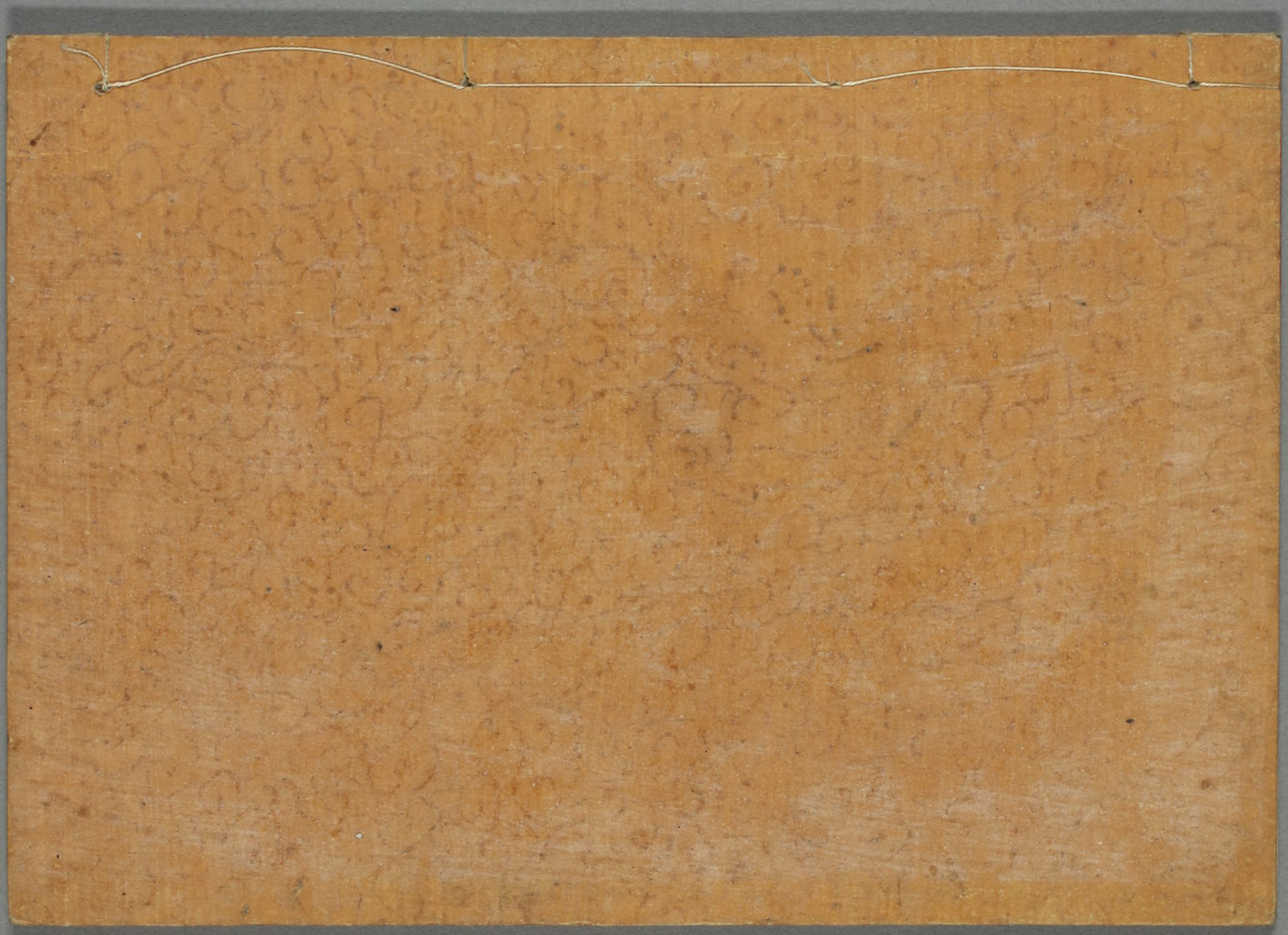
ゆうひ行でも見ハ知り〳〵ふすじやそ〳〵て又市中ハ物の
中とハ長〳〵ひ遠ひで遠方もあふあるやうかをのじやぞふ
でも見ハ菜やへでもひそびみ洗まてゆ紀あるさ〳〵な
ゆじ〳〵ち〳〵ハ急俄で只チウ〳〵と湯と吹あうちそこら
の大さ分菜屋のゆん世へあろされると菜屋の料理人が
ゆん〳〵ヲヤ見ハめづ〳〵しふふ恰亜尼ハ幾ゆそと
いふとハイ幾ゆで上やせふヲそんゆ〳〵それてよう〳〵
とゆ後のそゆ〳〵変がモウその恰ハいよ〳〵ハ方の内
の地獄の釜で煮やせふ。あう〳〵べさやう〳〵あさりやせと
ゆ後のそゆ〳〵のしやよやつぷう恰ハそれても見ぶ

桶の中へ入られて水と入らるるとハア是ハ又あのあるを出て来てそらゑんくとようくそびあるうち料理人が洗ひ上げて鍋の中へ入出給いむ〳〵給よもるがよかろうと為とおし入て上かゝ塩とバラ〳〵ふりかけると給いよいあるよあつてハ是ハ又潮ぐみもてあるさいふ〳〵くこちの世界ふるつさヤレく焼〳〵や仏法よやとおの〳〵ハ内へモウ鍋のもに薪ぐらぐ〳〵火がボロ〳〵とあるうちあんぺたつと今グラくとあるハ初まつこうるすぐやようそれふ給をマダく内くでらうやぐふゆ〳〵の方ろう暖うふあつてあるが是よぐもあつてそふかチト是ハんまぐも知らけ

ようふのチユウくとうびあるうちッイろ〳〵くとあ上るがその時よあつく給がふるよ大きなにとけけてヤレくけつやヤレ苦しや今ハ内ゆうふ用よ遠るとのちつとあよるがつふろうぐふあげる仕ゆうもきつろうれ。あさけあへるとそれとぐのゆうれ歌つても悔んでも猿ふいつ人情の為りぐのゆうふも仕ゆうがふい先辛ゆうるふ蕎麦あこと女がけつ〳〵実の夫を蕎麦といひ合せ己よ殺さつんぐ〳〵まで来さるが病歌よゆうび終よ御上へ捕られ五逆情の上者人とも死罪よ行つれゆ〳〵ぐその死罪ゆ行つる〳〵時者人ぐら馬へ五ふてその面ゆ市と牽回し

廃墟へつまづいて倒て居人ともるかゝおろ〳〵已ふ級う
あるといふ夢よおゝの号体裏さやちに変その時カノ
女ゞ釜まへ行ていひんにゝふえかゝりのやうふう
まそう家でハあるつゝぶかまゞ出るの人の笹ちへ集てハ
いろ〳〵あるといひかけ走やるうゝツイそゝもその
家よあつゝ今月廿せうゝ月よ逢やうといふてあろふ
釜まへ根みをいつてげゞ行てこけまうぬものじやあん
うそのちゞめよいろ〳〵あるすいひうけさ時ゞカノ地のうん
かゝへ引うけられる家よで地獄の釜れ出る弟のきうふ
じやうゝやとおそうゝやと逃ゝゞよんふそのけふいあのれ

もゝうゝんでかゝつゝあいゝく鍋ゝ中でゆへ上る後う
あつゝその中うゝ海でゝ楽ゝいひ並べゝゝて
地獄の釜の中うゝ念仏いひあるのゞるふ合ぬそれふ
又今の女ゞうへ乗られて牽ゝ時ふい強勢と持せて
ゝゝんにゝふ南無阿弥陀佛〳〵こいひ〳〵牽ゝられ
逃てゝげゞゞ行ゝと家の毒ふそのゞやあふう後生彼へゝといふ
ゝも悪突よ浮生彼へものゝゝゝよ出ゝふものゞや出ふ
の霊根ハ疾ゝう腐てモウ地獄の釜へちへつて仕まつゝゝ
うゝその行のぬけがゝと御上の出慈悲で牽まゝゝゝせ
法へゝゝんせあゝるのゞやふそれゝも新〳〵ゞゞ行ふ

ゆつりぐや角〻釜の中うゝ五合ほどゝあるゝ
おそのぐやあんうの御上い物の大義大悪ぐやそれゝ行
ぞや年性をもうゝ考へ人間の為と西東を為て居る
物の人の前をはゝ小五切おさるものゝようゝ考へて
ゝゝとぐよんそれでその中に後の世をたのみにもる
ぐつかりで此世の為とおろそうふゝうゝ来年と
あてゝゝて今年と高くうもるものと皆仏法でも給
因りとゝひまはげゝぐでゝゝで四五よ此もあぐりはり
ゝあゝぬ年ゝ物年ゝ後べゝあゝれるでゝぐうまた

下の巻へつづく